

# ラロックと門之助を歩く

## -別子銅山夢物語(2)-

西原 寛<sup>1)</sup>

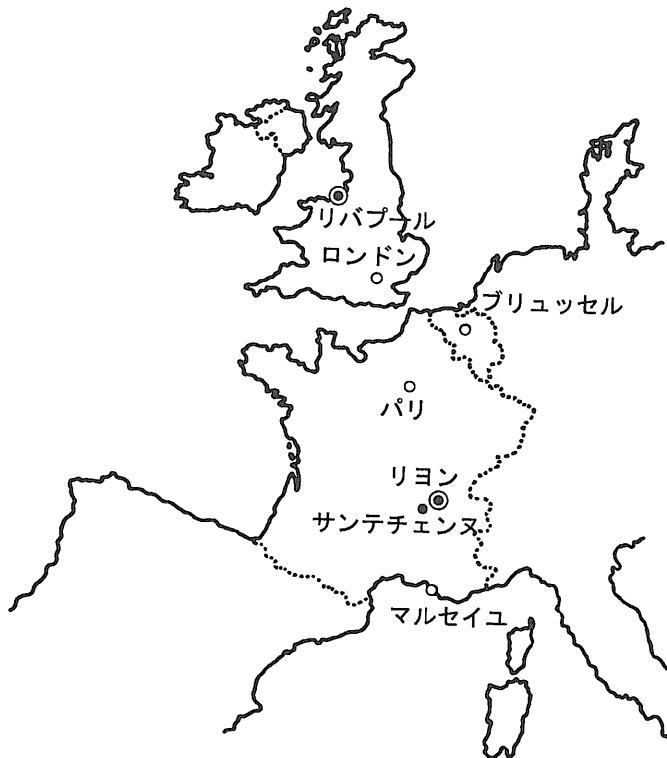
### 1. はじめに

別子銅山の遺跡を新居浜市のまちづくりに活かそうとする動きについては、前回長井秀旗さんがいろいろと紹介をしました。そのなかでも触れていますが、今回は1994年に別子にゆかりのある「ラロックと門之助」をフランスに訪ね歩いたことを綴ってみようと思います。

その頃、私は新居浜市役所の観光開発課で東平記念館の建設に追われていました。東平は、大正から昭和初年まで採鉱本部があったところで、標

高760mの山中の急な斜面に鉱山社宅が立ち並んでいました。東平は、「とうなる」と読みます。仕事をしながら、明治初年に別子を再生させたルイ・ラロックや塩野門之助の足跡をたどり、地域に物語を作っていきたい気持ちが募っていました。というのも、実際に記念館ができて、それなりのストーリーがないと夢やロマンは生まれなかったからです。

まちづくりに関心のある60人ほどが集まり、銅夢物語・新居浜市民会議をつくりましたので、そのメンバー4人でフランスに出かけました。



第1図 位置図。

1) 銅夢物語・新居浜市民会議(幹事):  
〒793-0010 愛媛県西条市飯岡2075-2  
Tel/Fax: 0897-55-8037  
E-mail: nisibara@shikoku.ne.jp

キーワード: 新居浜市, ラロック, 塩野門之助, 別子銅山

## 2. パリ鉱山学校を訪ねて

さてラロックの母校の当時のパリ鉱山学校(注1)はどのような学校だったろうかと思って調べはじめると、調べれば調べるほど判らないことがでてきました。わかったのは、ラロックが別子にやってきた前年、1873年1月20日に岩倉使節団が鉱山学校を訪れ、フランス全土の大きな地質図を見て「これぞ文明のあかし」と驚いたという程度です(注2)。

さて、その鉱山学校はいったい何処にあるのだろうかと探してみると、何とパリのど真ん中カルチュエタンではありませんか。しめた、と思いました。初めての所ですから、わかりやすいのが一番なのです。パリ発祥の地シテ島から南に歩いて10分もかからないリュクサンプール公園に隣接しています。しかし、日本で入手した地図では、リュクサンプール公園は載っていても、鉱山学校のところは空白になっているものがほとんどです。それだけ鉱山学校は一般の人には馴染みがうすいのでしょう。

このパリ鉱山学校は、フランス革命前夜の1783年3月19日の王制議会の議決により、何と造幣局に創設することとなりました。行政は、その頃まで王宮の一室や私邸で行われていましたが、これを改め王宮から独立した建物に官庁が入ることになりました。その最初が造幣局でした。造幣局はシテ島の南、セヌ川の左岸にあり、現在は貨幣博物館となっております。室内を自由に見学することができます。

鉱山学校の初代学長は、バルサザール・ショルジュ・サージ(Balthazar Geoges SAGE)といい、パ

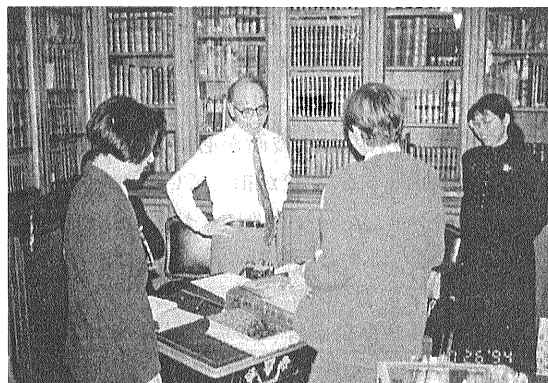


写真2 パリ鉱山学校でルロワ女史(右から2人目)から聞きとり。



写真1 パリ鉱山学校。

リ生まれでまだ43歳でした。そのころの学校は3年制で夏には5ヵ月間の現地研修がカリキュラムに組まれていました。学校をつくったのは、当時外国に依存していた冶金や分析をフランス自身ですることを目指したもので、ドイツの鉱山地帯にあるフライブルグでは、1767年すでに鉱山学校ができていました。

1789年に成立した革命政府は、その2年後に鉱山学校を閉鎖しました。なぜ閉鎖したのか、理由ははっきりしませんが、1794年になって今度は鉱山学校の設置を決定しています。しかし、この決定は計画にとどまりました。実際には、ナポレオンが権力を握った1803年になって、サボアのペシに学校ができました。鉱山のある土地に学校を設けるべきだとするナポレオンの考えに基づくものでした。

鉛・銅・銀などを産するペシ鉱山はモンブランのふもとと海拔1,500mの高地にありました。山中のペシでは実習のみを行い、冬はアルプスを源流とする川沿いの町、ムーチェ(Moutiers)に降りて講義を行いました。写真で見ると、ペシの学校はちいさな窓が数えるほどしかなく土蔵のように見えます。ペシが学校の所在地ですが、パリ鉱山学校でもらった資料では、学校名の方はdes Mines de Pesey-Moutiersとなっています。

ペシに続いて、1812年には産炭地方ザールのガイスラウテルンにも学校を設けました。ところが1814年にナポレオンが没落し、フランスは占領地だったサボアとザールを失ったため、この2つの学校もなくなりました。この代わりにできたのが、パリと炭田のあったサンテチエンヌの鉱山学校で、ともに1816年に設置されました(注3)。

N° 264  
Larroque  
Louis Claude  
Bruno.

MAIRIE de Grasse ARRONDISSEMENT de Grasse  
 Du vingt cinq (vingt-cinq) an mil huit cent trente six, à l'heure de midi  
 ACTE DE NAISSANCE de Louis Claude Bruno Larroque  
 né à Grasse le jour d'hier à deux  
 heures du soir fils de François Joseph Larroque  
 profession de Professeur au Collège de Grasse âgé de treize ans, domicilié  
 à Grasse et d' Arlette Marie Bellan, dite Goussé  
 âgée de vingt dix ans, domiciliée à Grasse  
 Il a été vérifié que l'enfant à moi présenté est du sexe Masculin  
 Sur la déclaration à moi faite par le dit François Joseph Larroque  
son âgé de treize ans, profession de professeur  
 domicilié à Grasse, quartier du Parc de Ballon  
 Premier témoin, François Paulin Brugué âgé de treize ans,  
 profession de Esprit domicilié à Grasse  
 Second témoin, Jean Louis Lévans âgé de vingt ans,  
 profession d' ancien militaire domicilié à Grasse  
 CONSTATE, suivant la loi, par moi Sieur Joseph Basile de Serres, premier  
adjoint du maire de Grasse délégué remplissant les fonctions d'Officier public; et  
 lecture du présent acte a été donnée à la partie déclarante et aux témoins, qui ont signé.

*(Signatures)*  
 Larroque      Lévans      Serres  
 Brugué      Lévans      Serres

第2図  
ラロックの出生証明書。

従って両校は、その前史を共有するという密接な関係にあります。パリ鉱山学校の2階の階段の踊り場には、モンブランの大きな絵が飾られていました。今度は、造幣局でなく現在地のリュクサンブール公園の脇にパリ鉱山学校ができたのです。私たちが案内された図書館は、第一次世界大戦でフランスを勝利に導いたフォッシュ将軍が、戦死した学生の霊を慰めるために1927年に寄贈したものです。3階まで吹き抜けになった周りには、木の本棚がアールを描いて立ち並び、こういうところで勉強すれば、よく頭に入るような気がしました。

3. グランゼコールとは？

パリ鉱山学校もグランゼコールのひとつなのですが、あまり聞き慣れないグランゼコールについてお話をしたいと思います。1794年に開設された理工科学校や師範学校をはじめ、陸軍学校、国立美術学校、国立高等音楽院がグランゼコールの代表的なものです。この頃、パリには国立自然史博物館もでき、フランスは世界でも、自然科学の先進国でした。サロン風の情報交換を行っていたパリの科学アカデミー(1666年設立)の科学一般から、各分野の専門性が要求される時代へと転換していま

した(注4)。この高等技術教育をグランゼコールが担うことになったのです。

技術論にとどまらないグランゼコールの使命感をよく表しているものに、革命記念日であるパリ祭にシャンゼリゼ通りを三色旗を掲げて行進する国防省が所管する理工科学校の学生の姿があります。王政を倒し、そのもとの領主の権力を奪った後にできたのは、中央集権制の近代国家であり領民に代わる国民の誕生でした。この国民国家を担うには、優秀な官僚を必要としたのです。

グランゼコールのさきがけは、1748年に創設された土木学校(注5)です。この頃、国王顧問会議は大領主を除いて、それより小さな中・小領主や地方長官の経験者で構成されていました。税金を徴収するだけでなく、道路や運河・橋などの公共事業を行うには、それなりの技術が必要となります。その人材の供給を土木学校が担っていました。

しかしながら、大学とは別になぜグランゼコール(注6)ができたのかという疑問もあります。古い歴史を誇る大学の遠源をたどれば、1200年にノートルダム教会の参事会が経営を始め、人々の苦しみを救済するため、神学者、医者、法曹を必要としたことに行き当たります。大学の原型は、この三者を養成する神学部、医学部、法学部です。イギリスで産



写真3 ルイ・ラロック.

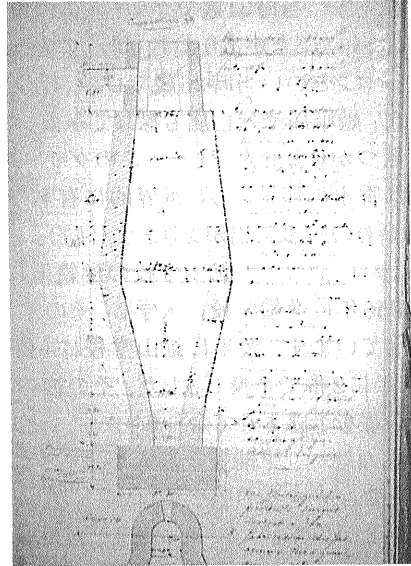


写真4 ルイ・ラロックの卒業研修記録.

業革命があり、フランスに革命があり、科学や技術の振興が強く求められる時期にあっても、教会の保護のもとにあった大学は、旧態依然としてその殻に閉じこもったままでした。大学が教会からの影響を逃れたのは、革命後の1808年に発布されたナポレオンのバカロレア勅命からで、国民国家になって、ようやく教会でなく、国家の手により大学入学資格試験であるバカロレアが行われ、教育の機会均等が図られました。

大学に進むには、バカロレアだけでよいが、グランゼコールに進むには高校に併設された準備学校に入らなければなりません。一時期グランゼコールに進む方が大学より進学しやすくなり、学生の質が落ちたので、準備学校が設けられたといえます。フランス革命がもたらしたものは、大衆教育でなく、国民国家を担うエリート教育だったことは強調されてよいでしょう。

さて、現在のグランゼコールの状況ですが、1992年で見ると、小規模のものが多く、およそ300校、12万人の学生がいます。それに比べると、大学は86校で131万人の学生で、大衆化しているようにみえます。

パリ鉱山学校は、理工系では理工科学校に次ぐ、フランスでは2番目に難しい学校といわれています。1976年には南仏のソフィアアンティポリスに分校を設けました。ここには、学生65人に対し、科

学者が42人、支援技術者が106人もいて、いかにその専門性を重視しているかが伺えます。

ソフィアアンティポリスはニースから西へ20kmのところであり、2,300haの土地にベンチャー企業が目白押しとなっています。ここに勤める15,600人のうち、6,000人が情報通信分野に従事し、しかも1,000社のうち7割が従業員10人未満といえます。

パリ鉱山学校の学長が1969年に提唱したソフィアアンティポリスに分校が立地する時代となり、パリ鉱山学校の変貌は著しく、鉱山についてはわずかに地質学などに面影を残す程度で、今や一般的な理工系の学校といってもいいようです。

#### 4. 別子銅山とラロック

南仏のグラス市から取り寄せた出生証明書によると、氏名はルイ・クロード・ブルーノ・ラロック (Louis claud Bruno Larroque) となっています。1836年11月26日の午後2時にアルプ マリティーム県 (Les Alpes Maritmes) のGrasseに生まれました。出生地のブルバール デュ バロン (Boulevard du Je ballon) はグラス市のメインストリートです。残念なことに、地番が記載されていないので、現地で生家を探すのは難しいと思いますが、通りはせいぜい数百mぐらいでしょう。機会があれば歩いてみたいと思っています。父はフランソワ・ジョセフ・

ラロックといい、当時31歳でグラス市の中学校の教師をしていたことがあります。母はアデライト・ジャンヌ・メロンといい当時26歳でした。出生証明書のほかに、婚姻届や死亡届も探してみましたが、これらは見つかりませんでした。このグラス市は、今日では香水の産地として世界的に有名で、市内には40余りの香水工場があります(注7)。

さて、ラロックはパリ鉱山学校の学籍簿によりますと、1856年に準備学校に入学し、その年に14番で卒業しています。翌年に鉱山学校に1番で入学し1860年に2番で卒業しました。その後の別子銅山での活躍を予感させて余りあります。パリから東洋の辺境の地へ、才能豊かな人が来てくれたものです。大変な人を探り当てました。しかし、ラロックはどのような顔をしていたかさえ、最近までわかっていませんでした。鉱山学校のルロワ女史は、「卒業写真を毎年撮っていますが、ラロックの頃の2-3年の写真が残っていません」と話していました。そこで、私の方から手持ちの写真を寄贈しました。ラロックの写真は後にも先にも、この一枚だけです。5年間のフランス留学を終えて日本へ戻ろうとする別子銅山の鉱山技師、塩野門之助に贈るために、1881年8月28日にパリで撮ったものではないか、といわれているものです。

ラロックの卒業研修旅行記をカメラに収めようとパチパチと撮りましたが、論文を写真に撮るのは、やはり無理がありました。見かねたのカルロワさんが「近くマイクロフィルムにするので、それができれば連絡します」と言ってくれました。これを帰国して数ヵ月後にフランスから取り寄せました。140年



写真6 チリオリエール サンテチェヌ市長(右から4人目)と交歓。



写真5 サンテチェヌ鉱山学校での交歓(壁のタペストリーがペシーの鉱山学校)。

前の卒業論文をひとつひとつ永久保存するところが凄いいと思います。卒業研修では、トスカナやコルシカ、南仏へ4ヵ月余り出掛けて地質調査や銅山や工場の視察を行っています。76ページの論文と10枚の図面があり、斜めに傾いた伸び伸びとしたフランス語は、目論見書と全く同じ筆跡です。インクがかすれているところもありますが、翻訳できたらいいなあ、と思っています。

ラロックは別子銅山の支配人である広瀬幸平の招きにより、1874年存亡の危機にあった別子にやってきました。1年と10ヵ月の間、銅山の実況見分をつぶさに行き、目論見書を書き上げ、東延斜坑や製錬所をつくることを提案して、別子の再生に大きく寄与したのです。

最近、この目論見書の翻訳が完了し、逐次「住友史料館報」に掲載する運びと聞いています。その工法的なものについては、塩野門之助が訳して、斜坑や製錬所をつくったわけですが、当時の銅山の状況や新居浜や山中の様子はどのように書いているのか、翻訳には興味がないものがあります。しかしラロックは別子で働くことを熱望しながらも、雇用の継続には至らず失意を抱いてフランスに戻りました。

帰国後、彼は、後を追うようにやってきた塩野門之助を母国でサポートしました。日本にいるときに通訳として世話になった門之助への恩返しだったのでしょか。しかし、門之助がサンテチェヌ鉱山学校へ入学するときには、「本校は石炭開採のみで銅山には役立たない」と言って足を引っ張りまし

た。自分の別子での再雇用の道が閉ざされるのを気にしていたのでしょうか。

フランスにおけるラロック(注8)ですが、別子に来る直前に住んでいたのはユルム街で、ここにはソルボンヌ大学があり、鉱山学校とは目と鼻の先にあります。日本から帰国後は、モンパルナスの近くにいたことがあり、亡くなったのはリュクサンブール公園の西だったそうですが確証はありません。他界したのが本当に1883年ならば、帰国後わずか6年ほどの47歳です。そうであるなら、彼の人生はフランスでよりも、日本で最も輝いたと言えるのではないのでしょうか。結婚していたかどうか、子孫がいるかどうかもわかっていません。彼の数少ない消息を示すパリ鉱山学校の同窓会誌を発行する建物は、学校から歩いて5分ぐらいのパリ天文台の近くにあります。

## 5. サンテチェンヌ鉱山学校と塩野門之助

サンテチェンヌと聞いてピーンとくる日本人は、サッカー通の人ぐらいかも知れません。98年のW杯では開催地のひとつとなりました(注9)。

リヨンから南西に50kmぐらいの山間部にある工業技術都市で、人口20万はフランスでは10位前後の規模を誇っています。かつては近くに豊富な炭田があり、16世紀頃から工業が盛んで、フランスで最初に汽車が走ったことでも知られています。今もボタ山がのこっていますが、ほとんど緑に覆われています。Saint-Etienneと書き、直訳すれば「聖エティエンヌ」となります。宗教を否定した革命政府のときには、一時アルムヴィルと改名していました(注10)。都心の公園を囲むように市役所とサンテチェンヌ教会が建っています。文化面でも、フランスでも古い歴史のある国立劇場があり、現代美術館も有名です。ダムの人造湖ではヨットが浮かび、山ではスキーも楽しめるとのこと。

サンテチェンヌ鉱山学校(注11)へ留学した塩野門之助は、嘉永6年(1853年)に松江市奥谷町一番屋敷に生まれました。屋敷は明治29年(1896年)に松江中学の敷地となりました。松江城のすぐ近くにある赤山と呼ばれる頂にあり、現在は松江北高校になっています。門之助の屋敷跡にあった老松は、高校の敷地にその意志の通り残されていま

す。高さ25m、幹の周り3.3mの巨木が2本ありましたが、残念ながら1本は昭和63年(1988)に枯れました。ちなみに松江北高校の同窓会は「双松会」といい、松は学校のシンボルになっています。藩校の修道館で門之助は、明治3年(1870)に、フランス人のワレットとアレキサンドルにフランス語を習いました。

別子を再興させるには、西洋技術の導入しかないと広瀬宰平に考えさせたのは、別子銅山へ一週間ほど来てもらったコワニエの助言でした。黄銅鉱から硫黄を取り出すことや山中の運搬路の改善の提案に触発され、本格的な調査と提言をもとめて雇ったのがラロックでした。ただ、このときに思わぬ問題が発生しました。ラロックと契約を交わしたものの、この契約にはリヨンに本社のあるリリエントール商會が別子銅山へ資本参加、共同経営する含みを残すという不備があり、それを工部省から指摘されるまで気づかなかったのです。この契約にタッチしたのは、初級のフランス語しかできない岡田梅蔵でした。これに懲りて、宰平が雇ったのが外務省にいた門之助でした。門之助はラロックの通訳として明治7年に別子にやってきました。

ラロックが目論見書をつくって帰国した直後に、門之助はフランスに行つて鉱山学を学びたいと申し出ました(注12)。明治9年(1876)に横浜を起航し、インド洋で機関の故障で漂流しながらも、何とかマルセイユにたどりつきました。この直後に、サンテチェンヌの鉱山を視察しています。門之助はフランス滞在中に、熱病にかかって寝込んだこともありましたが、ソルボンヌ大学で代数、製図などを学んだ後、サンテチェンヌ鉱山学校へ入学しました。同期生27人のうち最年長の26歳でした。教師の一人がグランデュエリで、私は学校から彼の講義録をもらいました。門之助の学籍簿も入手しようとしたがうまくいきませんでした。

5年余りの留学を終え、明治14年(1881)に門之助は新居浜に帰ってきました。洋式の惣開製錬所や四島製錬所の建設にあたり、地図に残る大きな仕事をしました。門之助は足尾銅山に、別子を辞めた後、一時勤務していたこともありましたが、そのとき、鉄の生産に使っていたベッサマー転炉を銅の生産にも活用することで成功しました。門之助は長い晩年を東京の目白台の屋敷で、庭師を使って

庭づくりを楽しみながらすごしたということです。コーヒーを好み、ベッドに寝ころんでフランス語の本を読んだとか、退職金を日本銀行に預金しようとして断られたなど、逸話も多かったようです。

## 6. 時間と空間を超えて

1994年に訪仏した後も、フランスとの交流が続いているので、そのいくつかを紹介して、話の結びとします。まず最初は、95年の夏にサンテチェンヌ鉱山学校で、地質学を専攻するジャック・ムットーさんが新居浜にやってきたことです。彼は奥さんが作ったサンドイッチを持ち、私は家内が作ったにぎりめしを持って、一日中、ピクニックがてら別子銅山の遺跡の中を歩きました。彼は、パリ鉱山学校の卒業生であり、東延斜坑に立ったときは、斜坑の提唱者のラロックと重なって見えました。ジャックさんも40歳で来山したラロックとさして変わらないし、風貌もよく似ています。パリ鉱山学校の人に来たのは、おそらくラロック以来ではないでしょうか。

97年の年末には、財団法人金属系材料研究開発センターの鍵本 潔専務理事が、住友金属鉱山の技術企画部長を伴って、東京からわざわざやってこられました。聞けば、ヨーロッパの金属会議で知り合ったサンテチェンヌのルコゼ教授から、愛媛新聞連載の私たちの訪問記の英訳文をもらったとか、それで、いったいどういう人なのか、顔を見たくてやってきた、というのです。

98年のサッカーW杯に、初出場の日本は沸き返りましたが、日本チームのベースキャンプの候補地として、サンテチェンヌが拳がった時があるのをご存知でしょうか。因に、日本チームを率いた岡田監督がかつて所属していた古河電工は門之助が一時働いていた足尾銅山にその源をたどることができます。

訪仏の時リヨン市立リヨン国際学園へ日本語の教員の派遣を頼まれました。小学校から高校まで、生徒は1,360人ほどですが、創立してまだ5年という新しい学校です。4年間かかりましたが、関西日仏学館の協力を得て、98年の秋から京都の大沢由美さんを送り出すことができ、新しい日仏交流の橋がひとつ増えました。近代化遺産が縁で、海を越え時の流れを超えて、このように 予期せぬ物語を

紡ぐことができ、感慨無量です。

- 注1) パリ国立高等鉱山学校-Ecole Nationale Superieur des Mines de Paris.  
 注2) 西川長夫編「米欧回覧実記を読む」p.99による。  
 注3) 鉱山学校の設立経緯については、佐々木正勇「明治前期に活躍したフランス鉱業家たち」pp.18-19による。  
 注4) 都城秋穂「科学革命とは何か」p.107。  
 注5) 土木学校及び国王顧問会議についてはアレクシス・ド・トクヴィル「旧体制と大革命」pp.150, 156, 355, 356による。  
 注6) 沿革については柏原康夫「エリートのつくり方」p.33,54,55による。  
 注7) グラスはもともと革製品の産地でした。パーティにイブニングドレスで貴婦人たちが出掛けるのはよかったが、手を飾る革手袋のにおいは彼女らの悩みの種だった。このにおいを消すために、革手袋に香水を染み込ませたのが、香水の産地への引き金となりました。フランスのネ(鼻)と呼ばれる調香師の3人に2人はグラスの出身です。  
 注8) ラロックの所在地については、佐々木正勇「鉱山技師 塩野門之助(上)」p.15による。  
 注9) サンテチェンヌは、1970年代にサッカーが強く、98年のフランスW杯組織委員長プラティニはその全盛期の花形選手です。人口20万人の都市に35,000人を収容するジョフロアギヤシャル スタジアム を持っています。  
 注10) 後藤健生「激闘ワールドカップ '98」p.172による。  
 注11) サンテチェンヌ国立高等鉱山学校-Ecole Nationale Superieur des Mines de Saint-Etienne.  
 注12) 渡仏と滞仏については佐々木正勇「鉱山技師 塩野門之助(上)」p.7,11による。

## 文 献

- アレクシス・ド・トクヴィル(1998):旧体制と大革命(小山 勉訳)、ちくま学芸文庫、筑摩書房。  
 柏原康夫(1996):エリートのつくり方、ちくま新書、筑摩書房。  
 後藤健生(1998):激闘ワールドカップ '98、文藝春秋。  
 佐々木正勇(1987):「鉱山技師 塩野門之助(上)」、日本大学史学会「史叢第39号」。  
 佐々木正勇(1977):「明治前期に活躍したフランス鉱業家たち、日本大学史学会「史叢第20号」。  
 西川長夫編(1995):米欧回覧実記を読む、法律文化社。  
 都城秋穂(1998):科学革命とは何か、岩波書店。

NISHIHARA Hiroshi(1999): Larroque and Monnosuke. — Romance of the Besshi Mine (2) —.

< 受付: 1999年5月15日 >